原眼科告知板

はら目ディカル通信

通算 106 号
2013 年 8 月 16 日
原眼科病院発行

1913 (大正 2)年、現院長の曾祖父が現在のユニオン通りの路地奥に原眼科医院を設立しました。
その後、1933 (昭和 8)年には約 100m離れた現在地に移転、医院から病院となりました。当時の職員は総勢 6 名、7つの病室はすべて畳で、入院患者さんは自炊をしていたそうです。
現在の建物は 1972 (昭和 47)年に新築。二代、三代院長の時代を通し、増改築を加えながら最新の医療にも対応しています。

1933 (昭和 8)年、移転当時の原眼科病院

原眼科病院は創立 100 周年を迎えました

初代院長
故・原 圭三(けいぞう)

初代は、トラホームが蔓延したり、メチルアルコールを飲んだ失明者が多出した時代です。圭三は患者の診察を通してメチルアルコールの流通を事前に阻止し、知事より表彰されたことがあります。

二代院長
故・原 蕃(しげる)

やがて医学も進歩し二代目の時代になると、角膜移植手術も行われるようになりました。新しい技術を積極的に取り入れ、白内障、緑内障、眼瞼挙上など、いろいろな手術が行われました。

三代院長・現理事長
原 孜(つとむ)

昭和も中頃になると眼科学の進歩は著しく、多くの病気が解明され、検査や治療法が次々と開発されます。この時期、孜とその妻・たか子は世界の眼科に目を向け、地域の人々に世界の眼科医療を提供することを目指しました。研究発表ではアメリカやヨーロッパの国際学会で数多くの受賞を果たします。同時に、職員の教育や病院全体で医療事故を防止する取り組みなど、組織のレベルアップにも力を注ぎました。

四代(現)院長
原 岳(たけし)

2011 年 3 月の東日本大震災直後に就任した現院長は、これまで培ってきた診療のレベルをより向上し、眼科専門病院としての機能充実を図っています。日本人に多い白内障、緑内障、糖尿病網膜症、加齢黄斑変性症の治療を中心に、地域の皆さんから信頼される施設をめざし、職員一同これからも研鑽に努めてまいります。

建物正面に描かれた
新シンボル、北斗七星

100 周年にあたり下野新聞に掲載された記事を、受付でお分けしています。